

ケンブリッジ便り

稲垣 省 五*

今、イギリスのケンブリッジ（特にイギリスのという修飾語を加えたのは、単にケンブリッジというと、アメリカのマサチューセッツにあるケンブリッジのことと思う人も結構いるため）の Institute of Astronomy (IOA) には、日本人ビジターが4人いる。日本からの長期滞在者は、ここ数年、1、2年に1人という状態だったので、多分統計的ゆらぎによる現象であろうが、IOAも随分人気があるという印象である（同一教室から、伊藤、筆者と2人もいるのも大きなゆらぎである）。天文月報編集部の家さん（彼もビジターの一人）から、筆者が一番早くから IOA に滞在しているという理由で執筆を依頼されたのだが、英国の大学制度など一般的なことは、月報78年2月号に松田卓也氏の「欧州滞在記」に書かれているし、IOAでの学問的アクティビティなどは Annual Report（例えば、昨年度のものは Quart. J. Roy. Astron. Soc. 23, 399, 1982）に書かれているので、ケンブリッジでの生活面に重点をおいて記事を書きたい。強調しておきたいことは、これは、筆者の個人的体験、あるいは推測に基くものであり、これが決して全貌ではないということである。日本人は多かれ少なかれ言葉に不自由で、また付き合う人が限られているため、日本人が外国について語っても、それだけが真実ではない、というのが筆者の体験に基いた実感である。筆者の場合は特に言葉に不自由しているため、群盲象を撫でるという感じで、巨象の一部を撫でているのは確かであるが、それが象のどの部分であるのかもわからないという、もどかしさを自分でも感じている。言葉について言うと、IOAを訪ねたい旨リンデンベル教授に手紙で問い合わせると、教授から訪問前に spoken English に充分流暢になっておかないと（リンデンベル教授は英語の達者な日本人天文学者として、J氏、Y氏、M氏をあげられ、この程度になるようにと手紙に書かれていた）、訪問の目的である科学的ならびに文化的コミュニケーションができないと注意されていた。それで、一年間秘かにブリティッシュ・カウンシルに通い、日本に来る外人の講演を聞いたり、彼等と何とか話ができる状態にまでなっていたので、これであと現地に行けばしばらくすると、慣れて、言葉には全く不自由しないだろうと思っていたが、訪問後2、3ヶ月後にそれが幻想であることがわかった。ブリティッシュ・カウンシルに通っているとき、BBCのワールドサービスは非常にゆっくりしゃべられている

というので本当かなと思っていたが、実際その通りであった。普通の（英国人向けの）テレビのニュースなどでも、ワールド・サービスの二倍くらい速いため、最初は難聴者向けの字幕付きのニュースで情報を得ていた。

筆者が家族同伴でケンブリッジに着いたのは昨年11月であった。前にイギリスを訪ねたことのある人から11月は一番悪い季節であると聞いていたが、全くその通りで、雨の降らない日は殆どなく、また日照時間がどんどん短くなり、目につくのは芝生の緑（イギリスの芝生は冬でも枯れない）とカレッジの古い建物だけで、来る前に数人の英国人からケンブリッジは非常にきれいな町であると聞いていたが、美的感覚が随分違うのだなと、その時は思っていた。また昨冬は何十年ぶりの寒さとかで、特別に寒かったのもイギリスの最初の印象を悪くした。イギリスは緯度が高いため、冬は3時頃日が沈む上に太陽の高度が低く、真昼でも日本の朝日のような感じで、太陽にあたってても全く温かくないというのも新しい体験であった。そのため、日中でも気温が上らず、氷点下の日が続く、雪は全く融けず、木々には樹氷ができるという状態（今から考えると、その写真を撮らなかつたのは残念である）であった。それが二人目の訪問者である原さんの来られた一月中旬に寒波が去り、おだやかな天候になり、さらに春になると公園（ケンブリッジには芝生の大きな公園がいくつもある）や家の庭に花が咲き、とてもきれいになった。意外だったことは木に咲く花が多いことで、桜、桃、梅をはじめ、リンゴ、ナシ、アーモンド、ポケなどの花が随分沢山咲いた。日本と違うところは、桜、桃、梅がほぼ同時に咲き、桜の花も一ヶ月くらい散らずに咲いている点である。

日本とイギリスの違い点はこの他にも色々ある。イギリスの電気のスイッチは下に押すと ON になること、猫が日本のに比べて大きいこと、雀の顔がみっともなく可愛くないこと（そのかわりにロビンという可愛い小鳥がいる）、犬と子供がよくしつけられていて公共の場所では決してさわがないこと（そのかわり旅行に犬を連れて行く人が多く、大きな犬が人と一緒に列車に乗ったりする。イギリスでは嫌煙権は守られているが嫌犬権は守られていない）、テレビのニュースのアナウンサーが原稿を見ずにテレビカメラをにらんでしゃべること（はじめは目を合せるのがつらくて、こちらの方で目をそむけていた）など書き始めるときりがない。

さて、ケンブリッジは5km四方くらいの小さな町

* 京大理 Shogo Inagaki: A Letter from Cambridge

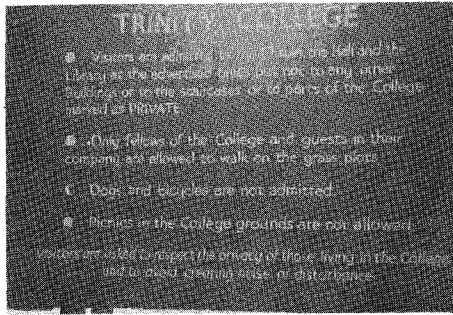


写真1 トリニティ・カレッジの立札。Fellowとその客人以外は芝生にはいってはいけないことが明記されている。

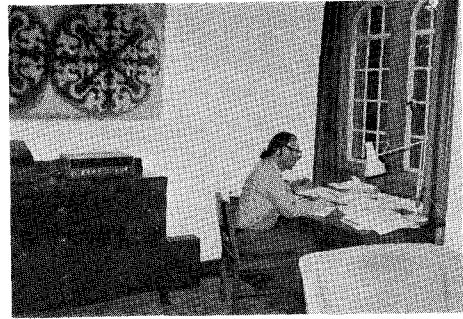


写真2 カレッジでの fellow の研究風景。この写真に写っているウィリアム・サスロー博士は1985年出版予定の「銀河天文学における重力の理論」というような題の本を執筆中である。左の方にあるハイ・ファイはソニー製で、テーブル・レコーダはオープン・リールである。

で、人口は約6万人である。大部分のカレッジや、商店等の集っている city centre と呼ばれるところは1km四方くらいである。ケンブリッジにも二階建バスなど公共交通機関もあるが、一番便利な乗物は自転車である。馬車と自転車が共存していた頃のなごりか、自転車にも自動車と同じ交通規則が適用され、一方通行のところは乗ってはいけないし、交差点で右折するとき、右手をあげて合図しながら道の中央に出て行かねばならない。筆者も通勤や city centre 等に行くときは自転車を愛用しているが、最初は随分怖かったが、慣れてしまえば平気である。自動車の方でも自転車にそれなりに気を配っているので事故があったという話は聞かない。

ケンブリッジ大学は20以上のカレッジといくつかのデパートメントの複合体で、カレッジはチューター付寮という感じで、講義などはデパートメントで行われている。最近では学生数が増えたため、すべての学生がカレッジで寝起きできなくて、最初の1、2年をカレッジで過ごすようである。イギリスは身分社会であるとよく聞かすが、カレッジの中にも厳然たる身分差別がある。Fellowというのが特権階級で（fellow の定義は筆者の英語力ではあまりはっきりしなくて、ケンブリッジで Ph.D. をとった人、カレッジの持ち主等だそうである）、写真1に書いているように芝生には fellow（とその客人）しかはいれなく、fellow's garden という fellow しかはいれない庭が各カレッジにある。Fellow はこの庭の中で散歩や読書をしたり、bowl という玉ころがしのゲームをして楽しんだりするようである。ディナーの時にも fellow は学生等より約10cm高いテーブルで食べるとのこと。写真2はジーザス・カレッジの fellow であるウィリアム・サスロー博士のカレッジでの研究風景であるが、この書斎兼居間は約15畳くらいの広さで、この他に寝室、台所等がある。学生の部屋も少しのぞかせてもらったが6畳くらいの一間で、ベッドと机だけがある簡素なものである。

Fellow よりもう一つ階級が上のカレッジの学長クラスになると住居は一段と立派になる。Master's lodge と呼ばれる大邸宅に住むようになり、master's garden もある。筆者と家内は、以前、Magdalene（モダリンと読む）カレッジの学長夫妻にお茶に招待されたが、Fellow's garden や寮など案内してもらった際、学長が扉を開け、手で押さえてくれている時学生が通り 'Thank you, sir.' と言ったので、なる程こういう時にも言うのかと感心した。ちなみに、その学長はサーの称号の持主で、従って夫人はレイディの称号を持っている。（夫にサーの称号が与えられると妻は自動的にレイディになるが、妻にレイディの称号が与えられても夫はサーにならないとのこと）。

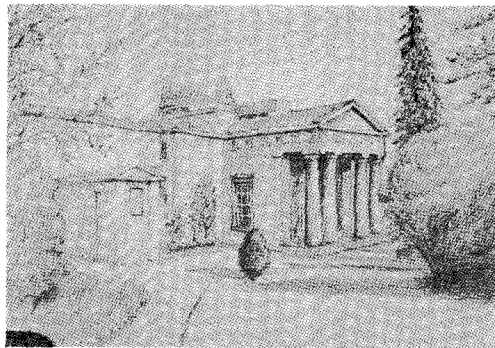
ケンブリッジ大学はヴィジターに便利ように出ていて、Cambridge University Society for Visiting Scholars という機関が、家さがしや、研究者の奥さんのための、英会話教室や、親睦のためのコーヒー・モーニングという会を主催したり、ストラトフォード・アポン・エイボンにあるシェークスピア劇場へツアーを計画してくれたり、色々ヴィジターの面倒をみってくれる。また University Centre という建物もあって、食事やダンス、パーティ、結婚式等ができる。喫茶室やバーがあるのは勿論のことである。筆者が渡英した時も数ヶ月前にすでに Society for Visiting Scholars が家さがしをしてくれていて、最初から家族連れで行っても全く不安はなかった。

ケンブリッジ大学には日本人ヴィジターが多い。正確な数はわからないが、多分50人はいるだろう。数年前までは日本人会があったが今はない。日本人会がどうしてつぶれたか、或は他の見方からのケンブリッジに興味のある人には、昭和56年4月から「世界」に連載された、中岡哲郎さんの「ケンブリッジの日記から」を読むことをすすめる。いかに日本人が多いかは、筆者は時々

大学図書館に行くが、そこで必ず日本人に会うことからわかる。大学図書館ではオリエンタル研究の部門が一つの階を占め、日本関係の本もかなり多い。筆者はそこで朝日新聞の縮刷版（一年前のものしかなかったが）や、中央公論や、岩波文庫等を借り、英語に食傷した時など読んでいた。そこにはマンガもあるというので期待して行ったが「のらくろ」しかなかった。

IOA は city centre の北西約 2 km, ケンブリッジの町のはずれにある。月報 (1973年, Vol. 66, No. 3) の藪下さんの記事にあるように、元は天文台と理論天文学研究所の二つがあり、それが 1972年に合併して IOA と呼ばれるようになった。従って、大部分の研究室も、ホイル・ビルディングと呼ばれる比較的新しい建物と、オブザーヴァトリー・ビルディング (画 1) と呼ばれる古い建物に分かれる。その他、APM 装置 (高速二次元プレート解析装置) のある建物や、シュミット望遠鏡や 36 吋鏡のドーム等もある。敷地内は芝生 (ここは fellows' green ではないので誰でもはいれる) や木々も多く、花も沢山咲いていて、リスを見かけることも多い。イギリス人は花が好きらしく、一種類の花をいつまでも植えておくのではなく、いつも季節の花が咲くようどんどん植え替えてゆく。芝生もいつもきれいに刈り込まれている (IOA には庭師が 2 人もいる)。

IOA は Annual Report を見てもわかるようにビジターが非常に多い。年単位のビジターは 10 人足らず、数ヶ月の人は数十人、数日の人 (あまりにも短期のビジターは Annual Report に書かれていない) まで入れると数えきれない。IOA では午前 11 時から 11 時半までがコーヒー・タイム、午後 3 時半から 4 時 15 分までが



画 1 オブザーヴァトリー・ビルディング。1823年に建てられ、エディントンの研究室だった部屋もある由緒正しい建物。リンデンベル教授の研究室は当時食堂で、その隣の、教授秘書のアリス・ジュリエさんの部屋は台所だったとか。さらに、その隣の部屋が、筆者と、ニュージーランドから来られた、リンデンベル教授の元院生の、プレント・ウィルソン博士の研究室になっている。この画は、リース教授の秘書、ノラ・テイトさんが描かれた。

ティー・タイムで、この時には、自然と研究者や秘書が集まってくる。ビジターは、その時にいろんな人と会え、話ができる。(コーヒー・タイムはマーティン・リース教授の研究室のあるホイル・ビルディングで、ティー・タイムはドナルド・リンデンベル教授の研究室のあるオブザーヴァトリー・ビルディングでもたれるのも面白い)。コーヒー・タイムのもたれる部屋には、IOA のスタッフとビジターの名前付顔写真 (写真 3) があるのもビジターにとって非常に有難い。(IOA を訪問してしばらくするとドラフト・マン兼カメラ・マンのリチャード・スワード氏がボラロイド・カメラで写真を撮ってくれる)。写真が古すぎ、実物とは対応がつかず、用をなさない人も多少いるが、コーヒー・タイム、ランチタイム、ティー・タイムは研究時間の区切にもなっていて、朝 9 時頃から 11 時まで、11 時半から午後 1 時まで、午後 2 時から 4 時まで、4 時 15 分くらいから 6 時頃までというのが、IOA での平均的な研究時間帯である。IOA には食堂がないので、マディングレイ通りの向う側のキャベンディッシュ研究所まで、大抵の人は食事に出掛け、そこで典型的イギリス料理 (従って、デリケートな日本人の口には合わない) を食べることができる。コーヒー・タイム、ティー・タイムは IOA のスタッフにとっても気分転換と情報交換の場であることを付け加えておく。

IOA では、毎週木曜、ティー・タイムのあとセミナーと呼ばれる談話会がある。ここでは内部の人が話すこともあるが、外部の人の話が大部分である。セミナーと IOA のスタッフや長期、短期のビジターから話を聞

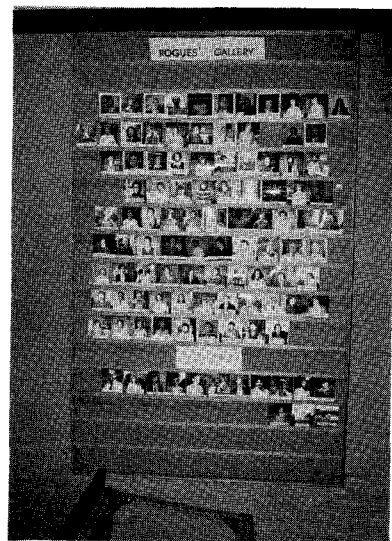


写真 3 コーヒー・タイムのもたれる部屋にある、IOA のスタッフとビジターの顔写真。写真の下には名前が書かれている。

いておけば、大部分の興味ある話は聞け、あえて研究会等に出席する必要がない、というのが今夏のIAU総会、シンポジウムに出席したとき思ったことである。IAUの会合は、外国の研究者をあまり知らない筆者にとって知り合いを作るよい機会ではあったが。

IOAでは多数の若手研究者(彼等の大部分は2,3年任期である)が、しのぎを削り合っているため、人間関係は非常に緊張している。彼等はいろんな機会に自分が優れていることを見せようとし、コーヒー・タイムなどに少し話してみても、自分にとってあまりメリットがないと思う相手とは、それ以上付き合おうとはしない。従って、筆者等は例外的なボランティアをのぞけば、年を取り、地位もでき、ある程度余裕ができた人以外はあまり話もしてくれない。

どういふコンパがあるかというのも興味のあるところであるが、聞くところによると定期的なのはクリスマス・パーティーだけで、あと、夏にIOAの庭でバーベキューをすることがよくあるくらいとのことである。筆者の滞在中は例外的に多かったようで、この一年間に、去年の11月のリース教授主催のキングス・カレッジでのピュッフェ・パーティー、クリスマス・パーティー、今年になって7月にバーベキューパーティー(写真4)、10月にリンデンベル教授夫妻主催のクレア・カレッジでのピュッフェ・パーティーと公式パーティーが4回もあった。外人は話をするのが好きなようで、殆どしゃべりづめでである。筆者等は、日本語でも話す内容がないので、家族でも連れて行かない限り、暇をもてあます。去年のクリスマス・パーティーの時は風邪で出られなかったが、簡単な英国のフォークダンスの講習のあと、それを踊ったとのこと。これも、社交ダンスのできない人々への心配りであろう。

ケンブリッジは家族にとっても暮しやすいところのようである。ケンブリッジはビジターが多い。ビジターは境遇も似ているため、ビジター同士で付き合い合うことが多く、いろんな分野の人と家族ぐるみで付き合いえた



写真4 IOAの庭でのバーベキュー・パーティー。向うに見える建物がホイル・ビルディングである。

のは大きな収穫であった。家内は、成人学級に出掛けインド料理を習ったり、キャベンディッシュ研究所を停年退官されたショーンベルグ教授の夫人と、モーダリン・カレッジのクリストファソン学長の夫人のところに週一回ずつ出掛けた。ショーンベルグ夫人には日本の絵本の翻訳をし、クリストファソン夫人のところでは、女王主催の晩餐会に招かれた時の話(女王は、テレビで見るときのように、いつもゆっくり話すのかと思っていたが、そうでもないらしい)を聞いてきたりして、機嫌よくしていた。長男は、こちらに来た時、6歳だったため、小学校の2年生にはいった(イギリスでは小学校は5歳から)。言葉を全く教えていない上、最初から朝9時から午後3時半までのフル・タイムだったので、どうなるのだろうと初めは心配していたが、一クラス20人足らずなのに、一クラスに先生が一人半くらいいるため、よく目が届くのか、初めからいやがらずに通い(今、日本にいと一年生のはずであるが、こちらでは、もう三年である。筆者の姪は、今五年であるが、そのうちに追い越されるのではないかと心配している)、今では、親しい友人もでき、言葉も話す方はもうひとつであるが、ヒアリングは筆者よりいいこともよくある。彼の頭の中には、日本語の世界と英語の世界が別々にあるようで、どういう風に言ったのかよくわからない時でも、全体として意味がわかるようである。長女は、3歳になり、暖くなった今年の春にプレイ・グループと呼ばれる幼稚園のようなところに入園申込みをしたが、長い入園待ちリストがあり、今年の9月からしか通えなかったが、行く自信ができるらしく、今日は絵を描いたよとか、パズルをしたよとか、誇らしそうに話す。

最後に、これから外国に出掛けようとする若い人に一言。まず話すべき内容を持つこと。次に、少なくとも中学生の日本語と同じ程度の外国語の力をつけるか、誰に何を言われても恥と思わないだけ厚顔になること。これが、外国で快適に暮らすための必要最小限の条件というのが、これまでの体験から得た結論である。

この文を書くにあたり、写真撮影を快諾して戴いた、ウィリアム・サスロー博士と、画を掲載することを快諾して戴いたノラ・テイットさんに深く感謝します。

(1982年11月)